

デザイン部会 12月例会

「生と死の場所性」から考える本物の計画学

八木澤壮一氏の講演



デザイン部会長 連 健夫

デザイン部会の昨年12月の例会で、共立女子大学家政学部教授の八木澤壮一氏に「生と死の場所性」をテーマに話をして頂いた。火葬場やお墓の歴史、様々な国の文化背景による特徴など、この分野の第一人者ならではの豊富な研究蓄積を基にした、分かりやすく味のある講演であった。近年における死亡場所として、医療機関が多いにも関わらず病院での霊安室の扱い方などに依然問題点があること。葬儀の行われる場所のほとんどが葬祭場であるにもかかわらず、多くの施設が無機的で流れ作業的な設計となっている問題点、火葬場のユーザーは死んだ人で文句を言わず、オーナーもはっきりしないから、改善が行われないという建設メカニズムの問題点など、様々な指摘が次々と飛び出した。ちなみに氏が設計に関わった京都中央斎場は、遺族への思いやりと配慮がある。焼場の入口はステンレスの無機的なものではなくディテールのある石材が柱に使われている。動線の整理がされていて、お骨を拾う悲しみのどん底にある遺族とこれから焼かれる遺族とが対面することがない。焼かれている間の待合室からは外の緑が眼に入り癒される。実は、私の母はここで火葬されたので、とても思い出深い。海外の事例では、韓国における円墳、塚としての墓地の特徴、岩に死体を置いて鳥に食べさせるというチベットの鳥葬、パリやロンドンの癒しの場としての公園墓地、スウェーデンのミネルスンドという墓碑を置かない埋葬の話、人口増と死生感の変化から87年から始められた

中国の海に灰をまくやりかたなど、氏が実際に調べ、体験した多くのスライドが紹介された。さて聞いているうちに、氏が扱っている火葬場やお墓など、死生感、民族、宗教など社会・文化背景に関係が強い施設は、科学をベースにした計画学では捉えきれないのではないかと、という疑問が生じた。これについて氏は、「これこそが計画学」と言いきった。グルーピングや規模計画、動線計画など機能的視点での切りこみは、まさに改善すべき基本的問題であり、設計のプロセスを含めた建設システムの問題も山積されている。なるほど納得がいく。しかし、私には氏の関心は、むしろ文化人類学的な幅の広い範囲に興味があり、氏の説明以上に氏自身の器の広さと深みを感じるのである。つまり計画学の自然科学的な部分にそもそもの限界があるのであって、八木澤計画学は、巾の広い視点を持つ新しい姿の（本来の？）計画学なのであろう。香川県に氏が設計した葬祭場「しすかの里」がある。讃岐の風景に溶けこんだ三木・長尾町の人たちの原風景を意識した場所性のある設計である。裏打ちされた機能性と人の意識をデザインに反映し、かつ現代的な雰囲気がある。この不思議な調和は、氏の柔軟なパーソナリティから来るものなのか。最近、2級訪問介護員、住環境福祉コーディネーター2級を取得されたとお聞きした。常に前進されている八木澤先生にエネルギーを貰った一時であった。

＜(有)連健夫建築研究室 主宰＞

